

## 2010年10月 設研アカデミックセミナー 要旨

設備投資研究所

講師：東京大学大学院経済学研究科 加納隆 専任講師

演題：Exaggerated Death of Distance: Revisiting distance effects on regional price dispersions

日時：2010年10月21日（木） 15:30～17:30

### 要旨

経済のグローバル化が進捗したと言われているが、依然として、同一製品であっても国家間で異なる価格が観察されており、一物一価の法則が成立していない。その原因としてまず考えられるのは、国家間の距離に起因する輸送費用の存在である。しかし既存研究の結果を見ると、地域間の距離は、地域間の価格差のごく一部しか説明しない。多くの研究によって、距離が2倍になった場合の価格差の増加は、わずか3%程度と報告されている。その一方で、輸送費用そのものを推定している一連の研究では、距離が2倍になった場合に輸送費用が20-30%増えるとの結果を得ている。これらの結果の隔たりは、どのように解釈できるのだろうか。本研究は、日本の農産物の卸売価格データを使い、新たな分析手法によって地域間の価格差と距離や輸送費用の関係を実証的に考察する。

日本の農産物の卸売価格データの主要な特徴は、産地と消費地が特定できる点である。これによる利点は少なくとも2点ある。第1に、価格差に距離が及ぼす影響の解釈が、輸送費用として明確になる。一方、価格差と距離の関係についての既存研究で用いているデータでは産地の情報を含んでおらず、距離の影響の解釈が不明瞭である。第2に、産地情報を推定方法の工夫と組み合わせることで、分析を技術的に改善できる。すなわち、距離の遠い産地と消費地のペアでは取引が行われておらず、データから脱落するというサンプルセクションと呼ばれる計量経済学的な問題への対処が可能となる。

主な結果は、既存研究の結果と整合的であり、それらを統合するものであった。まず、産地と消費地の距離が2倍になると、その価格差は20%ほど増加することが明らかになった。ここでの価格差は輸送費用と解釈できるので、輸送費用を推定している一連の研究と同様の結果である。また、サンプルセクションに対処しない場合には、距離が2倍になった際の価格差の増加率は3%ほどに留まった。これは、価格差と距離の関係についての一連の研究と同様の結果である。

以上の結果から、地域間の距離は、地域間の価格差に対して、それなりに大きな影響を及ぼしていることが確認された。価格差と距離の関係についての既存研究でその影響が小さく見積もられていた原因は、そこでの距離が必ずしも輸送距離を表していなかったこと、およびサンプルセクションの問題に対処していなかったことと考えられる。

以上